

P9-105

Scorpion plateを用いた鎖骨遠位端骨折の治療経験

福岡赤十字病院 整形外科

○瀬尾 健一、泊 真二

【目的】2005年以降、不安定型鎖骨遠位端骨折に対してScorpion plateを用いて骨接合術を行ってきたので、治療成績、使用上の留意点について検討した。

【対象】症例は12例、手術時年齢は平均41.1歳で、骨折型はNeer分類type2が11例、type3が1例、術後経過観察期間は平均10.7ヶ月であった。1例で肩鎖関節亜脱臼残存のためK-wireを追加し、1例で粉碎骨折部に対してwiringを追加した。X線評価として骨癒合の有無を判定し、JOA scoreの疼痛と可動域の項目を用いて臨床評価を行った。

【結果】骨癒合は全例で得られたが、関節リウマチを合併した1例でプレートによる皮膚穿孔を生じた。

【考察】Scorpion plateは肩鎖関節を跨がないプレートのため、術後運動制限、早期抜釘の必要がなく、最終診察時に良好な可動域を保てた。また、遠位骨片の軽度粉碎例には骨膜や周囲の軟部組織ごとフックをかけることによって固定できるという利点があり、今回の症例でもそれを利用し、全例に骨癒合がえられた。しかし、遠位骨片の粉碎が強い場合や、骨折部がフックより遠位に及ぶ場合には強固な固定が困難であり、使用には注意を要する。

P9-107

整形外科の患者における過活動膀胱の有病率の調査

大田原赤十字病院 整形外科

○吉田 祐文、榎木 弘和、鎌田 雄策、高橋 洋平、木村 昌芳、木場 健

【緒言】疫学調査では40歳以上の成人の過活動膀胱（以下OAB）の実数は800万人を超えるものと推定されており、整形外科の症例の中にも相当数の症例が存在すると推測される。整形外科におけるOABの有病率の現状を質問票を使用して調査した。

【対象】40歳以上の症例のうち過活動膀胱スクリーニング質問票（以下質問票SQ）と過活動膀胱症状質問票（以下質問票SS）の聞き取りを実施した303例が対象で、2008年6月に調査を行った。

【方法】質問票SQの聞き取りを行い、少なくとも1つの症状があれば質問票SSの聞き取りを行った。質問票SSで尿意切迫感スコアが2点以上で、かつ合計が3点以上の場合をOABとした。性別・年齢・疾患ごとのOABの有病率を検討した。

【結果】303例のうちOABと診断された症例は57例で19%であった。男性では121例中24例で20%、女性では182例中33例で18%がOABと診断された。40～49歳では15例中4例で27%、50～59歳では48例中6例で13%、60～69歳では67例中13例で19%、70～79歳では121例中22例で18%、80歳以上では52例中12例で23%がOABと診断された。脊椎疾患では188例中41例で22%、下肢の疾患では55例中9例で16%、上肢の疾患では28例中4例で14%がOABと診断された。

【考察】整形外科でOABは現在のところ幅広くは認知されていないが、整形外科を受診した症例の19%が質問票による調査ではOABと診断され、最も有病率の低い50代でも13%がOABであることを考えれば、少なくとも40歳以上の症例に対しては積極的に問診を行い診断をする必要があることが示唆された。

P9-106

小児頸椎損傷を疑った1例

大津赤十字病院 整形外科

○伊勢 健太郎、田縁 千景、青木 弥寿弘、井関 雅紀、榎尾 崇、東 勇哉、満 和樹、北村 崇之、光野 一郎、由良 茂人、宮田 誠彦

【要旨】小児の外傷による頸椎損傷を疑った1例を経験したので、文献的考察を含めて報告する。

【症例】8歳、男児。

【既往歴】特記すべきことなし。

【現病歴】父にいわゆる「肩車」をしてもらっていてバランスを崩し、約2メートルの高さから転落して頸部の痛みを訴え、救急外来を受診した。

【初診時所見】頸部の痛みを訴えた。頸椎の可動域制限は明らかではなかった。歩行は可能で、知覚、運動麻痺を始めとする神経学的脱落症状は認めないようであった。

【画像所見】頸椎単純X線、側面像にてC2/3間に頸椎椎体後縁の不整を認めた。機能撮影は行わず、頸椎単純CTを追加し、椎間関節の脱臼や椎弓の損傷等のないことを確認した。

【治療経過】C2/3間の頸椎不安定症と診断し、入院させた。成書による診断、治療方針の確認の過程でpsudosubluxation of C2 on C3というnormal variantがあることを知り、画像所見を再検討した。Swischuk (spinolaminar) lineのアライメントは良好で、psudosubluxation of C2 on C3と診断し、頸椎カラー固定として保存的に安静のみの経過観察を行った。約1週間の安静にて疼痛は軽快し、後の機能撮影にて不安定性を疑わせる所見は認めず、治癒した。

【考察】小児の脊椎骨折は、小児骨折の約1%で、脊椎骨折全体の約2%であるとの報告がある通り、まれである。本症例のごとく、一見、外傷によるもののように見えても、正常骨端核や先天奇形等により、成人より誤診をしてしまう可能性が高く、診療には細心の注意が必要だと思われた。

P9-108

Panner病の1例

原町赤十字病院 整形外科

○福田 和彦、浅井 伸治、斉藤 健一

Panner病は小児期に発症する上腕骨小頭の無腐性壊死で、比較的まれな疾患である。今回われわれはPanner病1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

【症例】6才（小1）男児 平成18年10月、右肘関節痛と腫脹を主訴に初診。スポーツは空手をしていた。初診時、右肘関節は $-30^{\circ}/90^{\circ}$ と可動域制限があり、X-p上、上腕骨小頭骨端核の亀裂、扁平化。MRI上、関節液貯留、小頭骨端核のT1、T2強調画像でいずれも低信号を認め、Panner病と診断した。治療は、まず2ヶ月のギブス固定しその後は、右肘関節痛や可動域制限は消失したものの、X-p上は、小頭骨端核の分節化などの壊死進行傾向が一時みられたが、追跡期間2年7ヶ月の平成21年5月の時点（小4、9才）では症状全くなく、X-pもMRIも改善傾向が強く、野球以外のスポーツを活動的に行っている。